

日本銀行松山支店旧店舗

中村茂樹 日本銀行文書局技師

昭和七年（一九三二）、日本銀行は、「いで湯と城と文学の町」として知られ、四国商工業の中心地として栄える松山に、四国地方で最初の支店を開設しました。松山支店開業時の店舗は市の中心街に建つ古典様式の建物として、市民に長く親しまれてきました。第九回は、そんな松山支店の旧店舗を紹介します。

松山支店の開設

松山は、江戸期より伊予緋^{いよひ}（注1）の生産地として知られ、明治期に入つて織機の改良に伴いその生産量は増し、明治末期には日本の緋生産量の半分を占めるに至りました。こうした繊維産業の発展に伴い、松山は四国一の商工業都市として発展しました。

また、古くから瀬戸内海交通の拠点であった三津浜港と松山市内を結ぶ交通事情を改善するために、明治二十一年（一八八八）十月に四国で最初の鉄道、伊予鉄道^{いよてつ}（注2）が開通し、更に明治二十五年（一八九二）五月には新たに開港した高浜港まで伊予鉄道は延長

され、瀬戸内海交通の拠点としての松山の利便性は高まりました。

明治三十七年（一九〇四）から翌年にかけて行われた日露戦争中、松山にロシア兵俘虜収容所^{ふりよ}（注3）が置かれたのも海上交通の拠点としての利便性によるといわれています。松山市民と市内への外出が認められていたロシア兵俘虜の交流は、松山と道後温泉の国際化という副産物も生み、戦後の国際観光文化都市^{こくわん}（注4）指定につながっていったともいえます。

一方、松山の金融面をみると、中小銀行が乱立し、手形交換所も設置されていない状況にあり、商工業都市として発展する松山を支えるには必ずしも



写真上 新築設計時に作成した外観スケッチ・阪東義三画（昭和六年）
写真下 旧店舗の外観（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

十分ではありませんでした。また、当時松山は、広島支店の管轄下にありましたが、現金輸送をはじめとして松山の金融機関と広島支店との連絡は、天候に左右されやすい海上交通に頼らざるを得ないことから、地元からは日本銀行誘致の要望が強まっています。

一方、取引先の増加や業務拡大が見込まれた日本銀行内部でも、神戸支店（昭和二年（一九二七）開設）に次ぐ支店設置の候補地を選定している中で、商工業の発展度合い等から松山を最有力候補としていました。

そんな中、昭和二年（一九二七）八月の金融恐慌における県下銀行への日銀特融を機に、広島支店からの海上交

注1 伊予緋

愛媛県松山市で製造する緋（前もって染め分けた糸で織り上げた織物。日本三大緋のひとつ。緋は普段着の和服の反物として親しまれ、第二次世界大戦中は女性のモンペとして活用された。

注2 伊予鉄道

狭軌の軽便鉄道としては日本で初、民営鉄道としては日本で二番目の鉄道事業会社。明治期の車両は夏目漱石により紹介され「坊っちゃん列車」と呼ばれた。

注3 ロシア兵俘虜収容所

日露戦争のロシア兵俘虜収容所として日本で最初に松山に設置された。ロシア兵は政府の方針で自由外出など厚遇され、松山市民との間で国際文化交流が行われた。



写真1 長野宇平治
 明治26年(1893)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店をはじめとする数多くの銀行建築を手掛けた。(生1867~没1937)(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

図1 松山支店の所在地



通依存の脱却の必要性を痛感した日本銀行は、昭和四年(一九二九)十二月に、四国地方では最初の松山支店の設置を決定しました。
 日本銀行は、支店開設に向けて松山市内三番町の一角に用地を取得し、支店建築計画が始まりました。(図1)

松山支店の建築

松山支店の設計は、長野宇平治(写真1)に委ねられました。

長野は、辰野金吾(注5)と共に、明治期の一連の日本銀行各支店の設計に携わった後、日本銀行技師を辞して設計事務所を設立していました。その後大正十二年(一九二三)の関東大震災を機に本店建物の震災復旧に携わり、昭和二年(一九二七)の本店増築工事を機に再び日本銀行臨時建築部(注6)の技師長に就きます。長野は、技師長として、本店増築の設計と並行して、臨時建築部筆頭技師の阪東義三(注7)を加えて松山支店の設計に取り組みました。

長野には、松山の地に特別な思いがあったと思われます。

夏目漱石(注8)と正岡子規(注9)が大学予備門(後の第一高等学校)の同期として深く親交したことは広く知られていますが、長野もまた、その同期の一人でした。大学予備門時代に、絵心のある長野が建築の道を決めたとき、同じく建築の道を志望していた漱石は、長野の実力を見て英文学の道を選んだともいわれています。また、長野は第五高等学校(現熊本大学)の英

語教師として赴任中の漱石をわざわざ訪ねており、二人の親交は相当に深かったと見られます。

ちなみに、漱石は、子規の故郷である松山に、愛媛県尋常中学校(旧制松山中学、現県立松山東高等学校)の英語教師として赴任します。その間、漱石の下宿家(現愚陀仏庵)に子規が同居し、俳句会を開いて互いに将来の日本文学を語り合いました。松山赴任中の体験は、後の漱石の小説『坊っちゃん』の下敷きとなります。

長野は、すでにこの世にいない同期の二人が築いた文学の町・松山に建物を設計することに深い縁を感じたことでしょう。

昭和六年(一九三一)四月に松山支店の新築設計が決定し、同年八月に清水組(現清水建設)の請負で着工されました。工事は予想以上の湧水のため基礎工事が難航したものの、現場の努力で予定工期を二十日間短縮して、同年(一九三二)九月に竣工、同年十一月一日に松山支店は営業を開始しました。

建築美を追求した古典様式建築

新築時の松山支店は、鉄筋コンクリ

注4/国際観光文化都市
 日本において、国際的な観光・温泉等の文化親善を促進する地域として法律により指定された都市で、現在松山のほか、京都、奈良、軽井沢など二都市が指定されている。

注5/辰野金吾

明治十二年(一八七九)工部大学校(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を第一回生として卒業。近代日本建築界の先覚者、日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築物を数多く手掛けた。(生一八五四没一九一九)

注6/日本銀行臨時建築部

日本銀行本店の一号館(三号館増築工事(昭和四年(一九二九)着手)昭和十三年(一九三三)完成)にあたり行内に組織された、長野宇平治技師長以下九〇名の技師・技手を擁した建築部。

注7/阪東義三

大正九年(一九二〇)東京帝国大学工学部(現在の東京大学工学部)建築学科卒業。日本銀行技師。長野宇平治の右腕として本店増築工事の設計・現場監督に携わった。(生一八九四没一九五二)

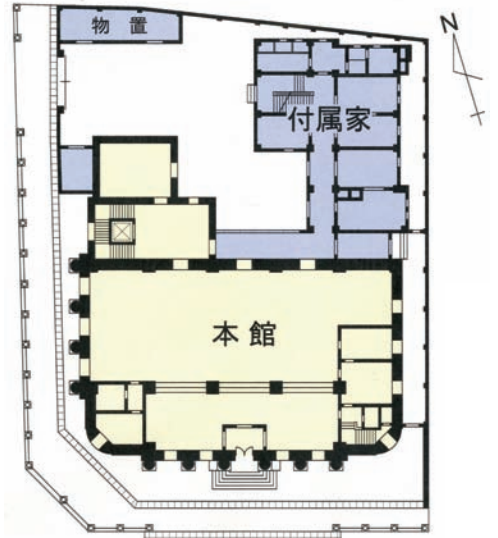
注8/夏目漱石

明治時代を代表する文豪者のひとり。正岡子規と出会って俳句を学ぶ。俳号は愚陀仏。主な作品は、小説『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『三四郎』ほか。(生一八六七没一九一六)

写真2 旧店舗の外観
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



図2 旧店舗の平面図 (新築時)



造平屋の物置の三棟で構成され、本館と付属家は渡り廊下で接続されていた。(図2)

建物設備に目を向けると、金庫は本館の地階に設置されました。松山支店より前の支店では、金庫を敷地内の別棟に設置しており、松山支店が、本館内に金庫を取り込んだ最初の支店建物でした。

外観について言えば、屋根は、陸屋根の上にタイル張りとし、外装の腰壁部分と出入り口枠等には地元愛媛県産

リート造り地上二階地下一階の本館、食堂・宿直室等の配置された鉄筋コンクリート造り地上二階地下一階の付属家、および木

の大島石(注10)を使用し、その他の外壁部分等には大島石に模した人造石を貼付しています。

また、外観の特徴として、道路に面する南側正面と西側側面の外壁に並ぶ一〇本のイオニア式オーダー(注11)と、外壁頂部を飾るバラストレイド(注12)による典型的な古典様式を採用しながらも、必要最小限の装飾に抑えていることが挙げられます。(写真2)

多くの建築家により多様な建築様式の建築がみられた昭和初期に、松山の街並みに生まれた古典様式の建物は、子規の写生に通じる究極の建築美を示したともいえます。

付属施設の拡張

昭和二十年(一九四五)七月の松山空襲で市街の過半が焦土と化したなか、県庁、市役所と共に松山支店は被災を免れたことから、日本銀行は、戦後にいち早く業務に取り掛かることができました。

戦後、業務が拡大するなか、開設時からの敷地にはわずかな中庭があるだけで増築の余地がなかったことから、昭和二十二年(一九四七)三月、店舗東側に隣接する三九七坪(約一三〇〇㎡)の土地を購入し、当面は木造倉庫

と車庫を設置し、将来の店舗拡張に備えました。(図3)

次いで、翌二十三年(一九四八)七月、既存付属家の二階上部に木造の三階を増築し、更衣室に当てるなど逐次付属施設の拡張を図りました。戦後、社会情勢が落ち着く中、昭和二十五年(一九五〇)、ようやく戦中に店舗の外壁に施した迷彩(写真3)を除去清掃し、また金属抛出のため撤去された暖房設備の復旧工事を施しました。翌二十六年(一九五二)には、本館中庭に荷捌所を増築し、現金荷捌き作業の順便等の改善を図りました。

更に、昭和三十四年(一九五九)に同荷捌所を事務室に改造のうえ新たな

図3 旧店舗の配置図 (増築後)



写真3 戦時に施された迷彩塗装
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

注9 正岡子規

明治時代を代表する文学者のひとり。俳句、短歌、新体詩など多方面な文芸活動により日本の近代文学に多大な影響を与えた(生一八六七-没一九〇二)

注10 大島石

愛媛県今治市沖の大島に産する花崗岩。石目が細かく、青みを帯びた石肌が特徴。「石の貴婦人」とも言われる。建材のほか、高級墓石材として使用。

注11 イオニア式オーダー

古代ギリシャ建築(古典様式)の列柱様式のひとつ。柱頭はかたつむりのような二つの渦巻き装飾に挟み込まれた受台の形をしている。

注12 バラストレイド

建物屋上等に設けられるバラスト(手摺子)をとりをささえるものをもつ高欄。

写真4 現在の松山支店



図4 現在の松山支店の配置図

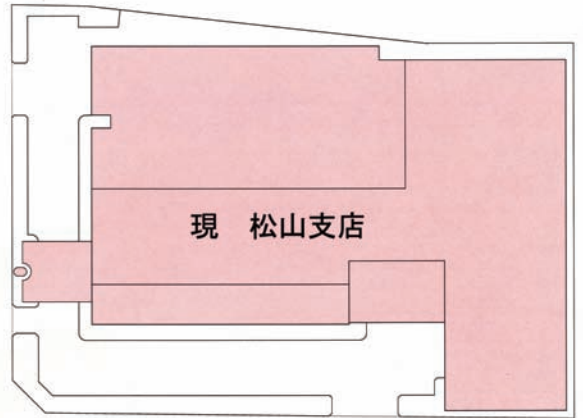


写真5 旧店舗の石膏模型 (1/50 縮尺)

荷捌所を中庭に新設し、昭和四十九年（一九七四）には隣接購入敷地の木造倉庫を取り壊して鉄骨軽量コンクリート造りの二階建ての付属家を新築することで、業務拡大による営業所の狭隘化^かに逐次対応していきました。

「いで湯と城と文学の町」に残る旧店舗の記憶

昭和五十年代を迎え、更に業務が拡大したことにより、既存金庫の収容力が飽和状態となり、また、本館建物も狭隘化と老朽化が著しくなるなど、業務に支障が出てきたことから、新店舗の建築が計画されることになりました。

日本においても、文化財や町並み保

存の必要性が強く求められ始めた時代になっていったことから、日本銀行では昭和初期の古典様式建物のひとつである旧店舗の解体の可否を検討しました。しかし、新店舗新築の先延ばしや代替地への移転新築は、老朽化対応と取引先の利便性を考慮すると難しく、現地建て替えしか選択肢はありませんでした。

昭和五十五年（一九八〇）九月、市民に惜しまれながらも、新店舗に向けて一期工事が着手され、仮設事務棟の設置など準備工事を経て、昭和五十七年（一九八二）十二月に旧店舗は解体されました。その跡地に二期工事として新店舗建設が開始され、昭和五十九年（一九八四）二月に完成しました。写

真4、図4

松山市民から長く親しまれてきた旧店舗の解体に先立ち、市民への一般見学が行われたほか、旧店舗の記憶を後世に残すために石膏模型を松山市立子規記念博物館^{注13}に寄贈しました。（写真5、現在は松山支店内に展示）

また、新店舗には、営業場の天井に旧店舗の格天井^{こうてんじょう}を模した照明器具を設置したほか（写真6、7）、営業場ロビー上部に旧店舗ロビーの持ち送り金物（写真8、注14）を再利用するなど、旧店舗の記憶が継承されています。

松山支店がこれからもますます地元^{じもと}に密着した活動を続け、「いで湯と城と文学の町」松山の街並みに建つ新店舗が旧店舗と同様に末永く親しまれていくことを期待します。

写真6 旧店舗の営業場（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）



写真7 現店舗の営業場

写真8 持ち送り金物
（現店舗の営業場ロビー上部）



注13 松山市立子規記念博物館
俳人正岡子規の世界を通して松山の歴史と文学を紹介する文学系博物館。昭和五十六年（一九八二）四月に開館。

注14 持ち送り
壁・柱から水平に突出させて庇・梁などの上部の荷重を支持する部材。